

# 武蔵野



本社 江東  
立川 武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006  
 武蔵野市中町1の13の1 3F  
 電話 0422(51)3131  
 FAX 0422(51)3133  
 musasino@yomiuri.com  
 都内版編集室  
 電話03(3217)1465・1466  
 江東支局 電話03(3631)6116  
 立川支局 電話042(523)4477  
 ホームページ  
 www.yomiuri.co.jp/local/

購読は  
**10120-4343-81**

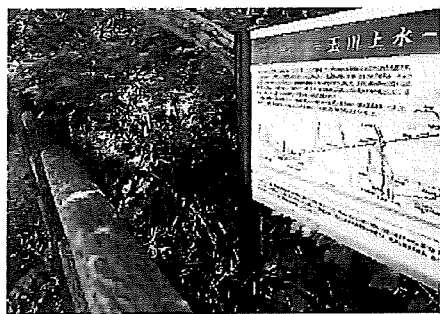
【広告】読売Palette  
 03(6272)9027  
 【折込チラシ】 0120-03-4343  
 【読売旅行】 03(5550)0666

6月18日(金曜日)  
 旧 5月9日<先勝>

■ あすの暦	通日 169		—東京標準—	
	月 7.7		満潮 9.59	23.21
	(正午)		干潮 4.32	16.40
	日出 4.25		(小潮)	
	日入 18.59			
月出 11.34				
月入				

太宰治の「乞食学生」(1940年)は、青春小説です。作中で「下手な作品」しか書けずに自己嫌悪に陥る小説家「私」は、三鷹駅から玉川上水沿いに井の頭方面へと広がる「葉桜」の「青葉のトンネル」を風景として発見し、「ああ、こんな小説が書きたい」という感慨を漏らします。「こんな小説」は「なんの作意も無い」作品のことを指しますが、作中の「私」にとってそれは夢として表れます。

## 太宰治 ②



井の頭公園内を流れる玉川上水

井の頭公園内の玉川の土堤で遊泳中の学生と出会い、「私」は眠りに落ちます。夢の中の「私」は学生とユーモラスな議論を重ね、学生のために一肌脱ぎようとしてサイズ合わない学生服に下駄履きという格好になります。その後、学生の嘘が判明するのですが結局意気投合し、宵の波谷で酔歌しているところを警察に声をかけられ、目を醒まします。夢の中で青春を回復した記憶は一つの物語として鮮明に刻まれ、全体として純情と友情に基づく旧制高校の世界観を表した明るい作品になっています。

恋愛要素を捨象して武蔵野の自然描写をしている点や「茶屋の婆さん」と「茶店の老婆」が類似している点は、国木田独歩の「武蔵野」と重なります。太宰は独歩を先輩作家として尊敬していました。「乞食学生」を独歩の「武蔵野」へのオマージュとして

# 独歩へのオマージュ 文人の武蔵野

みることも可能です。次回は、作中人物が「武蔵野の夕陽」を東京名所の第一に位置づけようと試みる小説「東京八景」(41年)をとりあげます。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

7月の「文人の武蔵野」は休みます。

### おすすめの1冊

## 「太宰治全集 4」

今回も、ちくま文庫の太宰全集からになります。4巻には、「東京八景」「風の便り」といった武蔵野という地名が登場する作品、「服装に就いて」「誰」といった井の頭公園を描いた作品が収録されています。また、王妃が庭園の小川に入水する結末を迎える「新ハムレット」も収められています。



(ちくま文庫)